



海上保安庁音楽隊

業務を越え、 一丸となって奏でるハーモニー 音楽による心の交流を通じ、 海上保安庁への 理解と信頼を得る

国家的行事や海上保安庁式典のほか、海に関するイベントでも演奏を行う海上保安庁音楽隊。隊員は通常業務と兼務しながら、心に残る演奏を目指して奮闘しています。



海上保安庁音楽隊の隊旗の前で。写真奥から齋藤嘉信（隊長、トランペット担当）、愛瀬有輝（クラリネット担当）、堀内彰（トロンボーン担当）、永井豪（サクソ担当）

海保のイメージキャラクター「うみまる」「うーみん」も観客のお出迎えとお見送りに登場

熱演! 定期演奏会



年に二度の集大成 定期演奏会は大盛況

ファンファーレが高らかに鳴り響き、金の飾緒輝く正装姿の隊員が登場すると、満員の会場は一気に華やかな雰囲気。平成26年11月8日、「海上保安庁音楽隊第21回定期演奏会」は年に一度の集大成の場。それだけに壇上の隊員も緊張を隠せません。指揮者である稲垣征夫氏がタクトを振り、第一部一曲目の行進曲「JACK TARTAR」の軽快な演

愛瀬隊員



永井隊員



第一部は主に春秋冬に着用する紺の第一種演奏服
第二部は夏に着用する白地の第二種演奏服に衣替え

堀内隊員



齋藤隊長



奏から、民謡をモチーフにした曲やオーケストラを吹奏楽にアレンジした曲などが続き、多彩な音楽の世界に引き込まれます。第二部は、「ゴジラ」や「アナと雪の女王」といった映画音楽、耳慣れたクラシックやポップスのアレンジなど、親しみやすい楽曲のオンパレードで大盛り上がり。そしてアンコールの「海猿のテーマ」「我らの指揮者」が終わっても拍手は鳴り止まず、演奏会は爽やかな余韻を残して幕を下ろしました。

その後、ロビーには安堵と達成感に満ちた表情の隊員たちが楽器を持ったまま観客を見送りに出ており、その様子を見守る職員や元音楽隊の姿も。「演奏会では隊員以外の職員も協力しています。楽曲やアレンジ、演出なども自分たちで考え、本当に手づくりの演奏会なんです。テクニックはともかく、皆さんを楽しませようという思いはプロの音楽団にも負けません」と語るのは、トランペット担当の齋藤嘉信。音楽隊では隊長としてまとめ役をこなし、所属する総務部政策評価広報室では、個人情報保護に関する



演奏終了後も鳴りやまない拍手! 演奏会の歴史始まって以来の3回のアンコール

る業務のほか、音楽隊に関する広報業務全般を担当しています。

「広報に携わる人間として、常に『海上保安庁に親しみを感ずってもらえるような演奏ができたか』ということを

自らに問うようになっています。個々のフレーズで『もう少し』のところもありましたが、当隊ならではの味のあるサウンドが出せ、観客の皆さんにも楽しんでいただけたようで、ほっとしています」

経験値はバラバラ 業務の合間をぬって猛練習

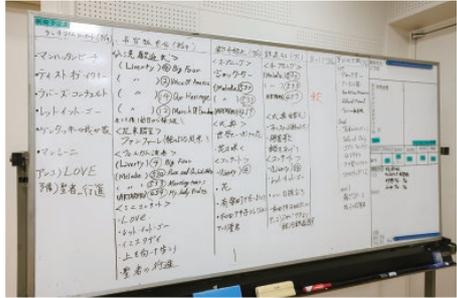
音楽隊の練習は、基本的には毎週火金の午前中と公演前2週間の集中練習のみ。それが通常業務との兼務での限度とはいえ、最近では年17回の公演で150曲程度を演奏しており、決して十分な時間ではありません。楽器演奏の経験が少ない隊員も多く、海上保安学校や海上保安学校で初めて楽器に触れたという人が約半数を占めます。8年目を迎えるサックス担当の永井豪もそ



演奏終了後はロビーでお見送り。この心づくしが音楽隊の魅力になっている



壁には賞状以外にも米国コーストガードとの交流を表す感謝状なども



音楽隊専用の練習室のホワイトボードには、各公演で演奏する曲目がびっしり

んな一人でした。

「初めはまったく音が出なくて…。なのに1カ月後には演奏会。そこで練習場近くに部屋を借りて毎日始業前には朝練、夜も通常業務後に深夜まで練習。そのかいあってなんとか演奏できたときはホッとしましたね。その後もメインだった先輩の異動などもあり、精神的にきついことはたびたびありました」

そんな永井に対して、所属する海洋情報部海洋情報課の上司は「音楽隊も仕事なのだからしっかりやれ」と励まし続けたと言います。

「所属課の理解があつて、業務の調整ができて、はじめて音楽隊の練習ができるわけで、本当にありがたいことです。そして、音楽が好きという気持ちだけでなく、仕事としてプライドがあるからこそ続けられているのだと思います」

通常業務との兼ね合いで、練習時間の

確保はすべての隊員にとって頭の痛い問題。クラリネットを担当する愛瀬有輝は警備救難部運用司令センターで当直制業務に就いています。

「当直明けの練習は疲労のため集中力を保つのに苦労します。また、聴くことも勉強だと思ひ、月に一回はほかの官公庁バンドや市民バンドのコンサートに行ったりして、演奏するときの音のイメージを膨らませるようになっています」

また、25年4月に入隊したトロンボーン担当の堀内彰も所属する交通部企画課で26年4月から早朝勤務となり、練習との調整に苦労していると言います。

「最近職場近くに通ったので、ずいぶん楽になりました。以前は通勤に往復3時間かかり、通常業務後に時間を見つけて練習場で少し練習するのがやっと。睡眠時間も削られ弱音を吐くと『好きでやっているんだからちゃんとやれ』と妻に叱られました」

(笑)。思った以上に厳しいけれど、お客さまに『楽しい時間を本当にありがとう』と喜んでもらえる、またがんばろうと思えます」

ひとり一人の音の力が高まって 全体の力を高められる



楽器の経験、現在の仕事、練習できる時間もバラバラ。そんな隊員が音楽隊として一つになり、聴かせるに値する音楽を作り上げるためには、さまざまな調整が欠かせません。齋藤は「地道な調整こそ、隊長の重要な仕事」と語ります。

「演奏指導の先生や隊員もいますが、練習の中で気づいた細かい修正点や注意点は私がある場で指導するようにしています。そして音楽隊としての行動全般についても、ひとり一人が当分の広報業務を背負っているんだという思いを一つにしなければ良い演奏はできませんし、観客に伝わりません。隊員の環境も含め、常に後方から隊全体を見渡し、『よ

り良い音を出すためにはどうしたら良いか』を意識して指導や隊員の所属課との調整などを行うように心がけています」

個性の異なる色をまとめて絵を描くように、各人が一つのイメージを共有して結束することで、全員で奏でる音として完成させていく…。その実感が音楽隊だけでなく、組織全体の士気を高めることにつながっていくでしょう。

「海上保安学校在学中は同じ学生で年齢も近い人ばかり。一方、音楽隊は、年齢・階級・仕事や経歴が違う。そんな異なるプロフィールを持つ者が違いを超えて関係を築き、音楽に昇華するところに兼務音楽隊としての魅力があるように感じます。その輪の中での経験は自分にとって大きな財産であることは間違いありません」(愛瀬)

指揮者による指導のない練習日は、隊員全員で音をチェックしながら進めていく



仕事中

**国民の信頼と理解のもと
成り立つ海上保安業務**

「それぞれの立場で役割を受け持ちつつ、自分の音を磨き上げようと努力する姿には多に刺激を受けています。たとえ失敗が続いたときでも『もっと練習しなければ』と気持ちを奮い立たせてくれるんです」（堀内）

尖閣問題や密漁などで緊迫した昨今

において海上保安業務の必要性が高まる中、時に「音楽なんて」という声が聞かれるのも事実です。しかし、海上保安庁が担うのは、海上における警備や犯罪の取り締まりだけでなく、治安維持・海難救助・災害対応・航行の安全確保、そ

して海洋調査などの多岐にわたり、それらの業務において、より高い効力を発揮するためには、国民ひとり一人の信頼と理解が欠かせません。

たとえば、海上での事件・事故の緊急通報用電話番号として「海のもしもは118番」が設けられていますが、異変に気づいた人からの迅速な通報があつてはじめて海上保安庁が適切に動くことができます。このように国民の協力を得ながら海の安全を守るという関係性は、陸上における警察や消防と国民の関係性に似ています。

「海での事故から命を守るためにも、知識の一つとして海上保安庁の業務について知っていただくことは重要なことだと思っています。演奏を通じて一人

でも多くの方に親しみをもちていただき、そのことが当庁への理解と信頼につながればと考えています。とはいえ、あまり堅苦しく考えず、演奏を楽しみにきていただきたいですね」（齋藤）

いつのころからか練習室に掲げられた『奏思奏愛』の文字。そこに込められたそれぞれの思いは、音楽に乗せて私たちの心に届けられます。ぜひ音楽隊の演奏会に足を運んでみてください。

**定期演奏会の
感想も聞きました**

P R O F I L E



総務部政務課政策評価広報室

齋藤 嘉信

平成5年入庁。音楽隊へは12年に入隊し、現場などで隊を離れるも24年から隊長として8年ぶりに戻る。

「練習のときはできていても、緊張などで音を外したり、スタミナが持たなかったりと悔しい箇所や反省すべき箇所も。克服しなくてはならない演奏技法がまだまだあるので、時間をかけてでも確実に演奏できるように努力したいと思っています」



海洋情報部海洋情報課

永井 豪

平成11年入庁。サクソフなどの木管楽器セクションのリーダーで、演奏会の舞台企画担当でもある。

「演奏会の中で企画したことの評判が良く、担当として素直にうれしい。全体的に音楽のレベルが上がってきているからこそ、細かいところが気になるようになってきた。もっと練習したかった!! この一言に尽きます」



警備救難部管理課運用司令センター

愛瀬 有輝

平成16年入庁。音楽隊に入隊して5年目になる。

「本番までの練習は厳しいものですが、演奏会本番では楽しく吹け、全体としてもまとまって演奏できていたのではないかと感じました。細かいミスやクリアできなかった課題がいくつかありましたので、これからも努力していきたいと思っています」



交通部企画課

堀内 彰

平成18年入庁。音楽隊へは25年4月に入ったばかり。

「緊張のせいか、練習では演奏できていたところがミス。それが引き金でミスが重なるという負のスパイラル状態となってしまった。「ミスしないように!」と思う気持ちを持つだけではなく、それ以上に楽な気持ちでかつしっかり自信を持って演奏するよう心掛けたいです」

演奏会の予定はホームページでもご案内しています

<http://www.kaiho.mlit.go.jp/syoukai/soshiki/soumu/band/index.html>